

## 私がおもつ都市景観賞／はじめて審査委員となつて

### ■次の時代は景観がファッションになる

河地洋子(香蘭女子短期大学教授)

ファッションの概念は4つだといわれています。1950年から60年代は洋服がファッションだといわれていたと思います。今はまず健康で生き生き、次は洋服、そしてインテリア、そしてコミュニケーションだ。私は次の時代というのは、景観がファッションになるのではないかなと思います。そして、市民ひとりずつが意識してまちに存在してコミュニケーションする。たとえば、あの家はいつも花がきれいとか、ふつうの家で彫刻が外にあつていつも可愛いねって子どもたちが騒ぎながら通るとか、そういう意識に市民がなつていくことを願って、都市景観賞を考へ運営していくべきだと思います。

都市景観賞というのは、デザイナーや有名な建築家が一生懸命つくつてくれるものではなく、市民が何かやつて、市民がこころあたりがいいんだよというものを期待していただんですが、整いすぎたというか、計画されたものばかりになつてくるような気がします。交番の応募がありました。市民が交番を見て、どの交番はさらにフィットして、してなかったというように、市民が採点することもおもしろいかなと思います。建築家の建てたものを、市民が本当にそれを福岡の地域のよい建物であると評価するってこともあつていいんじゃないかと思ひます。

シカゴでは、フランク・ロイド・ライト(アメリカ・建築家)が若いときにつくった地域があり、地域の人がそれを大事に育てながらそこで生活しています。しかも非常にオープンで、見学ツアーもあります。それをみて私は、日本も昔は開かれた世界ではなく、町民のところはオープンだったはずなのに、どうしてみんな開つて見えなくしてるんだろと思つたんです。「博多町家」ふるさと館も、博多の曲げ輪っぱを作る人とか、そういう人たちが集合体をつくり、そして実際にそこでやつていて、そんなまち並みができるもつとよかつたと思ひます。

### ■市民と専門家が討論して選ぶ景観賞

竹下輝和(九州大学工学部教授)

これだけ多くの市民が応募しているを知って、実はものすごく驚きました。建築賞は、専門家が応募し専門家が審査するというものだと思うんですが、景観賞は、市民からの応募がひとつのベースだろうと前から考えていたんです。ただ、20代・30代の人が多いので、60代・70代の人にもっと応募してほしいという感じがします。

景観の場合に一番重要なことは、その都市の市民の眼とか、意識のレベルの高さだと思うんです。たとえばシカゴという街は、建築でひとつの都市文化をつくるんだという意識が非常に高く、専門家ではない一般市民が建築家の名前をたくさん知つていて、ふつうのおばあちゃんも、うちはライトの本を持ってるんだよといつて見せるくらい浸透しています。そういう市民のベースがある。だから福岡で、建築や景観好きな人、俺は景観にはうるさいぞという人が、市民のなかで1%なのか、10%なのかでは全然違う。行政には、そういう人たちをどうやって育て、ネットワークしていくかという仕事があると思ひます。都市景観賞の応募者が固定客となつて、より一貫していうとサポーターだけ、景観ウォッチャーが、1,000人、2,000人単位で参加してくるという仕組みをさちつとつくつていくと思ひます。

景観賞というのは、専門家がいくらくらいかといつても、市民がいいといえはそれはいいにしようと思ひます。けれど、互いに討論しないといけない。という意味では、景観賞のやり方は、市民が探してきて我々の推薦はこうだとして、私たちが専門家は逆にそれを見てこうだという。そして討論しあうことで、お互いが共有しあうことをやらなないといけない。今までの9年間はひとつの成果だと思ひますが、これからの10年は都市景観についてのコミュニケーションをさちつとやつていくということも必要だと思ひます。

### ■ふつうの風景を都市景観賞で評価する

田崎順二(ランドスケープアーキテクト)

熊本ではさまざまな著名なデザイナーや設計者が参加して、アトポリスというのをやっています。福岡市の都市景観賞では、スーパードesignerではないとしてもさまざまなものがたくさん応募があつて、全体的なレベルの高さを感じます。ただ、やや若者志向に走つていく感じがします。最近、バリアフリーという言葉も言われていますが、それに対応したデザインは少ないと思ひます。また、歴史的なものを残していくことは重要なことだと思ひますが、そのなかで今年、「博多町家」ふるさと館というのが選ばれたというのはよかつたと思ひます。ランドスケープ側の意見からすると、やっぱりもう少し街路樹とか、緑とか、ふつうの風景、景観の応募や評価もあつていいのではないかと思ひます。

審査では、C部門のまちなみ・空間とD部門の街角のアクセントはむずかしかつたですね。まちなみ・空間は、対象の種類が多すぎてむずかしい。たとえば、公園は公園の作品の評価になります。この公園がよいとか悪いとか、この風景がよいとか悪いとかいうのは、一概にはいえないですね。また、モニタメントについては、作品はよいけど、設置の仕方やまわりの空間構成を同時にやつていないところもあつて、評価が非常にむずかしかつた。それから、どういふものがいつか都市景観に貢献しているのかということ判断しないといけないと思ひます。市民がよいというものは、よいんだと思ひます。そこを審査委員だけで決めるというむずかしさがあります。

これからは、電力会社の発電所などのように、他にも波及していくような社会的な効果があるものについては、作品そのものの審査をおこなうだけでなく、都市景観賞として努力に対して評価して奨励するという視点があつてもいいのではと思ひました。

### ■市民の投票で都市景観市民賞を

山本智子(弁護士)

私は世界中のなかから福岡を選んで住んでいます。その理由は適当に都会で適当に田舎という、この心地よさと住みやすさなんです。景観も、心地よい住みよい景観というのが、もっともほしいですね。そういう意味では、私は応募の数は少ないと思つたんです。またもつといるんなものが散らばつててくるだろうと思つたんですが、案外、票が集まつている。特に小さな建物というのは刺激的だとか有名なデザイナーだとかでなくても、もつと身近にある自分にとつて心地よい、あるいは不思議だと思ふ空間を応募されたらいいですね。雑木林のような庭をもつた家だとか、お化け屋敷のような庭があるんだけど、それがこのまちの特徴になつてくるんだとか、そういうものも応募されてたらいと思ひます。そして、市民のみならず、応募されたものに投票してもらつてもいいと思ひます。市民賞みたいなものがあつてもいいと思ひます。

この景観賞で非常に印象的でおもしろいと思つたのは、特別表彰です。私の思う心地よい景観というのは、ある建物とかある場所に限らずに、それを営んでる人の活動もひとつの景観だと思ひます。この賞に、みなさんのまちの活動で心地よいと感じていらつしやることをとんとん応募されて、それぞれの地域で、ある意味ではみなさんがもつているまちづくりの意識をだしてくださると、まちのなかの彩り、あるいは人の動き自体がにぎやかになるなというように思ひました。

審査に参加したら、福岡でも案外知らないところがあるなと思ひました。ですから、福岡市ウォッチングみたいな企画があつてもおもしろいし、賞をとつたものだけではなくて、応募があつておもしろかつたもののウォッチングマップみたいなものがあつたら、みんなまちを歩くときに見てまわりたいと思ひました。